

に似たり、然りと雖次に述ぶるが如く、七年には回鶻は更に吐蕃・葛邏祿と北庭に戦ひて勝を得、その八・九月頃には使を唐に遣して捷を告げたること疑無きが如くなれば、此の失敗は舊書に従ひて貞元六年秋の事と見るを以て當れりとすべし、かゝれば新唐書回鶻傳に、年月を示さずして書き續けたる吐蕃葛邏祿等との争は、貞元五年より翌六年（七八九年—七九〇年）に及びたるものなるを認めざる可らず。

吐蕃の西域に於る勢力は、高宗の咸亨元年^{〔三三二〕}四鎮を有するに至りてより以來、屢々隆替ありしが、茲に至りて當時回鶻に附庸たりし北庭地方も其の手に歸し、加ふるに従來回鶻に屬せし沙陀部落も、此の時より吐蕃に従ひ、其の部七千餘帳は、吐蕃によりて南の方甘州地方に徙され^{〔三三三〕}、浮圖川地方は葛邏祿に奪はれ、西邊に於る回鶻の勢力は、かくて一時頗る不振に陥るに至れり、然るに唐書回鶻傳によれば、奉誠可汗を冊したる年即ち貞元七年中の記事に

是歲回鶻擊吐蕃葛邏祿於北庭、勝之、且獻俘

と見え、舊唐書廻紇傳には

「貞元」七年八月、廻紇遣使、獻敗吐蕃葛邏祿於北庭所捷及其俘畜

と記し、唐會要にも亦

「貞元七年」九月敗吐蕃于北庭、使獻捷

と記せり、此の如く此の年回鶻が吐蕃葛邏祿と北庭に戦ひて勝ちたることは諸書の記する所一致し、疑を挟むべきに非れば、貞元五年以後少くとも三回に亙りて吐蕃及び其の同盟の爲に北庭地方に破られたりし回鶻は、此の年遂に復讐の志を遂ぐるに至りたるものなりとす、而して Kara Balgassun の回鶻碑文 XIV—XV に記さるゝ吐蕃及び葛邏祿と